伝統文化と生成文法の接点

日本語の状態化形式の構造について

金水 敏

キーワード：生成文法、状態化形式、アスペクト、非対格自動詞、語彙概念構造

要 旨

生成文法学者と国語学（日本語学）学者は、最終的な研究目的を異にしてはいるが、双方の成果と意見を交換しあうことは可能であるだけでなく、双方の研究の活性化にとって極めて有効であると考える。本稿では国語学者側からの生成文法の応用例として、日本語の状態化形式の構造に関する提案を行い、それが意味の明示化に役立ち、好ましい予測をもたらすことを示す。

1 はじめに——国語学者と生成文法

伝統的国文法と生成文法との違いは、対象の特殊と普遍、方法論として形式化を重視するか否かなど、いろいろな捉え方が可能である。これらの点について、本シンポジウムにおける郡司隆男氏のご発題でも詳しく述べられるはずであるので、ここで多言を費やすことはしない。ただ一点つけ加えるとすれば、国語学研究者としての私の、実践的な立場からの生成文法との付き合い方、心得、あるいは自覚のほどといったことではなかろうか。

既に国語学と生成文法の目標の違いから明かなように、国語学者としての立場を保つ限り、生成文法への接近法は、応用的であるほかない。生成文法の優れた論文は、その形式性・明示性によって、伝統的研究法からは決して得ることのできない日本語の性質を照らし出してくれる。それは、しばしば研究上の重要なヒントとなる。私自身、そのような研究に接して、何度も目を開かれる思いを経験してきたのである。

しかし、生成文法、特にチョムスキーのそれの本来の目的は、普遍文法の構築とパラメータの設定以外ではありえず、日本語という個別言語の分析・記述は、その目的に奉仕するデータに過ぎない。一方、私を含めた国語学者の最大の関心事は、日本語の構造・性質・歴史そのものである。つまり私が国語学者として論文を書いている限りは、いかに生成文法の概念を多用しているとしても、書かれたものは生成文法の論文ではない。むろん、国語学者としての立場を捨てて生成文法の論文を書くことはありえるが、一つの論文が同時に国語学であり生成文法であることは原理的に不可能である。

単に応用的な態度で生成文法に接するとしても、ことはそう容易ではない。近年は特に国語学者の中でも生成文法の動向に関心を持つ研究者が増えているように見受けられるが、そのような片手間の研究者にとって、正業の勉強をこなしつつ、日進月歩で変化していく生成文法の最新の動向を追いかけて行くのは並大抵のことではない(そもそも日本にいる限り、それは専門家でさえもむずかしいのであるから)。

このように最初から限定された状況の中で効果を発揮するのは、やはり研究者間の人的交流であると思う。私の場合特に、生成文法に関する知識の大半は、専門家による研究会や集中講義、また友人である研究者たちの談話等から得られる、いわば「耳学問」なのである。むろん自分にとって重要と思われる論文は直接読むしかないが、何を読むべきかという情報は、まず専門家からの助言によるのがいちばん手っとり早いし、効率的である。

私が研究者間の交流を強調するのは、それによって国語学者が利益を得られるからだけではない。逆に、生成文法学者にとっても利益を得る点があると考えるからである。日本語のデータを扱う生成文法の研究者には、国語学者から情報を得たいと思っている人は少なくない。Miyagawa (1989) のように積極的に古典日本語をデータとして取り上げている論文もあるが、そこまでででなくても、多くの生成文法学者は、データに関して視野を広げるために、国語学者のコメントを得たいと思っている。また生成文法の論文の中には、国語学者の目から見れば簡単に訂正できるような誤解や思い違いを犯している論文も時に見受けられるのである。つまり有効なコミュニケーションの経路さえ確保できれば、生成文法学者と国語学者はお互いにきわめて有益な情報の交換ができるはずである。少なくとも私は、そのような経路を形成したいと願いながら論文を書いているつもりであるし、同じような認識を持つ国語学“内”の研究者が私一人にとどまらないということも存じている。

さて、以下の節では、生成文法の知見が日本語研究に有益なヒントを与えるかも知れない事例の一つとして、筆者が近年興味を持っているアスペクト形式の問題について若干触れたい。

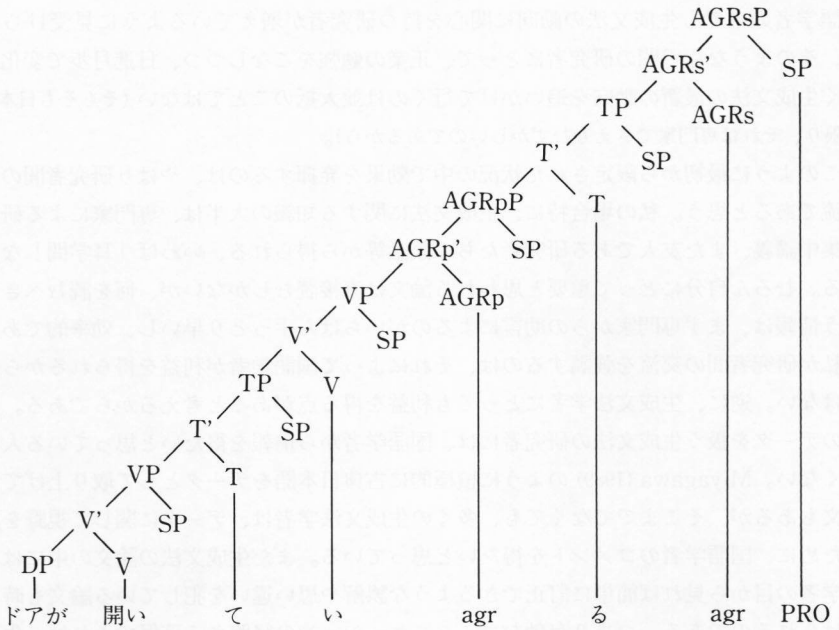
2 状態化形式の構造と意味

2.1 継続相とパーフェクト相

状態化形式とは、動詞のテ形や連用形に存在動詞が膠着した形態として分析され、継続相 (奥田、1978) やパーフェクト相 (工藤、1989) 等の用法を持つものを言う、筆者自身の用語である。この種の形式は、時代・方言を問わず、日本語ではかなり普遍的に見いだせる。状態化形式の持つ継続相・パーフェクト相等の意味は、動詞が表す動作・変化等のできごと的意味を、ある種の“存在”的意味に写像したものであると見ることができる(吉田(1993)参照)。このような意味を実現する形式としては、存在動詞が動詞句 (を含む構成素) を項として取る構造が最も自然である。例えば、Tonoike (1992) では、(1)に示すような構造をシテイル形式に与えているが、これはまさしく今述べたような構造を実現していると言ってよいであろう。つまりここでは、形式が持つ意味を、その構造との相即という点から考察するために、生成文法を利用しようというのである。

(20) 日本語の状態化形式の構造について

(1)



構造と意味の相即について、現代語のシテイルを例にとって考えよう。継続相は、項としての節 ((1)では TP) が表すできごと的意味から、動作の進行中の局面や結果の状態の局面を取り出すという意味的操作を存在動詞「いる」が行うと考えられる。この場合、「て」が相当する節内の時制は、意味的には空虚であり、形態調整のためだけにこの位置にある。一方、パーフェクト相では、節は「まるごと」のできごとを表すことから、時制辞「て」は参照時「以前」の完成的な意味を担う。またこの場合、存在動詞「いる」とその時制は、パーフェクト的意味における参照時を投錨する(現実の特定時点と結びつける)機能を果たすであろう。古典語の〜リ・タリ (鈴木(1993)等参照) や西部方言の〜ヨル・トル (工藤(1983)等参照) では、また少し違った説明が必要となるが、おおむね「ことがら」と「存在」の関係という図式は有効であると考られ、その限りでこの構造仮説は有効に働くのである。

2.2 継続相の意味と動詞句の構造

シテイルの構造を考えることは、さらに継続相を進行中と結果の状態に分ける場合にも有効である。1980 年代以来、生成文法の分野では自動詞の構造に二種のものを区別することが行われるようになった。一つは、動作主を持ち、対象を持たない「非能格自動詞」であり、もう一つは動作主を欠き、対象を唯一の項とする「非対格自動詞」である(Perlmutter & Postal(1984), Rosen(1984), Miyagawa(1989), 影山(1993))。ただし日本語学の分野では、三上章が早くも 1950 年代に「能動詞 (他動詞と非能格自動詞に相当)」対「所動詞 (非対格自動詞に相当)」としてこの区別に気づいている (三上, 1972)。

(2)　　〈動作主〉　〈対象〉

a．[　名詞句　[　名詞句　　動詞　]　]…他動詞　　能動詞

b．[　名詞句　[　　動詞　]　]…非能格自動詞

c．[　　[　名詞句　　動詞　]　]…非対格自動詞　所動詞

竹沢(1991)は、(2)のような動詞句構造を仮定した上で、シテイル形式において動作主の名詞句がガ格を付与される位置に移動された場合に進行中の意味になり、対象の名詞句がガ格を付与される位置に移動された場合は結果の状態になるとしている。この一般化は、大多数の分布を捉えていて、重要である。また、奥田(1978)がシテイルの意味を主語　主体の状態と捉えていることとも符合する（ただし主語の状態と主体の状態は場合によって区別が必要であり、奥田はそのことにも気づいている。後述する)。

さらに(2)の構造は、シテイル形式とシテアル形式の分布を説明する場合にも有効である。状態化形式の意味を単純化して、名詞句の指示対象の状態を表すと考えた場合、(2)の図式には4種の名詞句が存在し、その数だけ状態化形式が存在してもよいことになる。その四種とは次のようである。

(3)　a．動作主／他動詞……シテイル（主として進行中)

b．動作主／非能格自動詞……シテイル（進行中)

c．対象／非対格自動詞……シテイル（結果の状態)

d．対象／他動詞……シテアル（結果の状態)

そしてこのうちa－cはシテイル形式で表され、残るdはシテアル形式で表されることになる。このように捉えると、シテアル形式の継続相が他動詞にしか許されないこと、その意味がcのシテイル形式と同様に結果の状態を表すことなどが極めて自然に説明できるのである。

(3)の図式から、現代共通語ではシテイル形式は動詞句の中の最主要名詞句、いわば“主語”の指示対象の状態を表す、と一般化することができる。この文法的優位性によって、現代語ではシテイルが極めて多用されているわけである。しかし補助動詞「いる」と「ある」の語彙的個性を考えた場合、状態化形式の分布はむしろ次のようなものの方が自然ではないかという予測をいだかせる。

(4)　a．動作主／他動詞……シテイル

b．動作主／非能格自動詞……シテイル

c．対象／非対格自動詞……シテアル

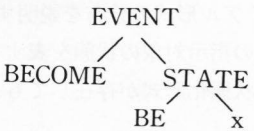
d．対象／他動詞……シテアル

つまり能動詞である「いる」は動作主の状態を、所動詞である「ある」は対象の状態を表す、という考え方である。そして上の予測は、近世の文献に現れた状態化形式において実現されていることが確認できるのである。現在の共通語の分布は、(4)においてシテイルがcの領域に侵食した結果であることが観察されている（坪井, 1976)。

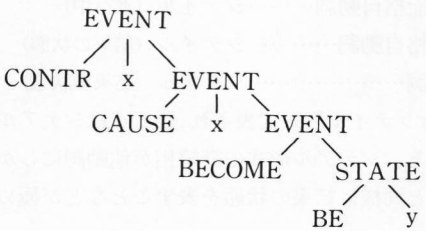
2.3 語彙概念構造

このように動詞句の構造を分析することによって、状態化形式の意味と分布が明示的に説明されることが分かったが、しかしさらに詳細に観察を進めていくと、(2)のような構造を仮定するだけでは分析が十分でないことが明らかになってくる。それはたとえば「服を着ている」のような〝再帰的〟動詞の両義性や、「木が切り倒されている」のような受け身文のシテイル形式の両義性などが説明できないというようなことである。ここでは、それらの解決のために、語彙概念構造という表示レベルを仮定することを提案したい。影山(1992)では、変化動詞と対象変化動詞(壊す、破る、……)の語彙概念構造を次のように仮定している。

(5) 変化動詞の語彙概念構造：



(6) 対象変化動詞の語彙概念構造：



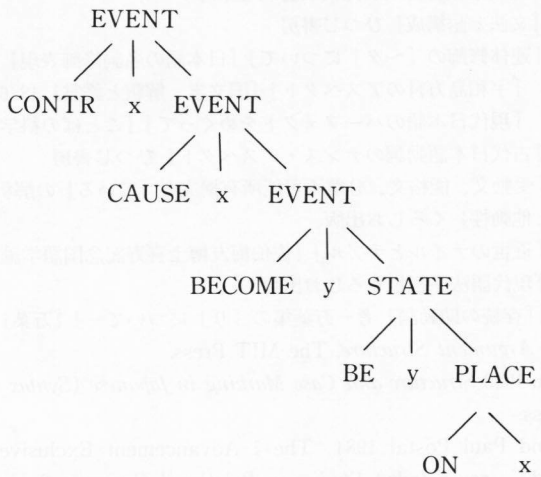
これらの構造では、自動詞の表す変化の意味が他動詞において階層的に包摂されている様子が的確に表されている。これらの構造は動詞の語彙的意味として登録されていると考えられるが、統語的ななんらかの操作を経た後も、文の意味解釈の入力として利用されるものと考えよう。シテイル形式の意味操作も、統語構造とあわせてこの語彙概念構造も対象となる、とするのである。次のような受け身文を例にとって考えよう。

(7) a. 見ると、庭の木はすべて切り倒されていた。
　　b. 大木が今、目の前で切り倒されている。

シテイルが取り出す状態の対象は、“表層”の主語「庭の木」と、語彙概念構造の最上位項である動作主という二つの候補を持っている。解釈に当たっては必ず一方が選ばれなければならないが、その際決め手となるのは「すべて」や「今、目の前で」のような副詞的語句で、これらが語彙概念構造のどの層を照らし出すかによって、解釈が大きく傾くのである。

次に再帰的動詞について考えよう。「着る」のような動詞は、次のような語彙概念構造を持つとする(金水, 1994)。

(8)



ここで、着る主体がx、服がyで表されているが、xは動作主だけでなく結果状態の場所を表す層にも現れている。「着ている」においてシテイルが取り出すのはxの状態であるが、それは語彙概念構造におけるxの分布によって、動作過程と結果状態の両義性を持ち得るのである。そしてこの場合も、最終的に解釈は一意に決定されるが、やはり副詞的語句等の文脈情報が大きな働きをするであろう。次の例を参照されたい。

(9) a．パーティー会場で会った彼女は、とても晴れやかな着物を着ていた。
　　b．彼女は今、となりのへやで服を着ている。

3 まとめ

前節では、生成文法で提案された統語構造や語彙概念構造を日本語の状態化形式に適用することによって、構造と意味との関係が明示的に捉えられ、好ましい予測力をも持ち得ることが示されたと思う。このような研究は第1節で述べたように、生成文法の記述的応用の域を出るものではない。しかしここで整理されたデータは、生成文法学者にとってもまた有効に利用可能なものであるはずである。むろん、前節では論じきれなかった問題も多く残されており、またこのような応用が常に成功するとは限らない。しかし、もっとも回避しなければならないのは、生成文法学者と国語学者（日本語学者）の間での、無理解ないし短絡的理解に基づく相互無視（軽視）の傾向である。両者の間に適切なインターフェースを設け、連携を保ち続けることは、単に特定の問題解決に有効であるばかりでなく、双方の学問自体の活性化にもつながるに違いないのである。

〈参考文献〉

奥田靖雄　1978　「アスペクトの研究をめぐって（上）（下）」『教育国語』53、54
影山太郎　1992　「統語的非対格性と語彙概念構造」『言語理論と日本語教育の活性化』文部省科学

研究費補助金研究成果報告書（研究代表者:井上和子）

影山太郎　1993　『文法と語構成』ひつじ書房
金水　敏　1994　「連体修飾の「～タ」について」『日本語の名詞修飾表現』くろしお出版
工藤真由美　1983　「宇和島方言のアスペクト」『国文学　解釈と鑑賞』48-6
工藤真由美　1989　「現代日本語のパーフェクトをめぐって」『ことばの科学 3』　むぎ書房
鈴木　泰　1993　『古代日本語動詞のテンス・アスペクト』ひつじ書房
竹沢幸一　1991　「受動文、能格文、分離不可能所有構文と『ている』の解釈」仁田義雄編『日本語のヴォイスと他動性』くろしお出版
坪井美樹　1976　「近世のテイルとテアル」『佐伯梅友博士喜寿記念国語学論文集』
三上　章　1972　『現代語法序説』くろしお出版
吉田茂晃　1993　「「存続の助動詞」考－万葉集の「り」について－」『万葉』147
Grimshaw, J. 1990 *Argument Structure*, The MIT Press.
Miyagawa, Shigeru 1989 *Structure and Case Marking in Japanese* (*Syntax and Semantics 22*). Academic Press.
Perlmutter, D. and Paul Postal 1984 "The 1-Advancement Exclusiveness Law, " in D. Perlmutter and C. rosen (eds.) *Studies in Relational Grammar* 2, University of Chicago Press.
Rosen, C. 1984 "The Interface between Semantic Roles and Initial Grammatical Relations, " in Perlmutter and Rosen (eds.) *Studies in Relational Grammar* 2, Univ. of Chicago Press.
Tonoike, Shigeo 1992 "PRO Expletive : A Case Study from Japanese Existential Sentences"未公刊原稿

――神戸大学助教授――